

竹田定簡と「太宰府址碑」

竹田家は、定直（1661～1745年）が福岡藩に仕え、貝原益軒に師事したことから、福岡藩儒者の家系として有名です。また定良は藩校修猷館を創設、以後幕末まで、代々竹田家がその館職を継承しました。竹田定簡（1814～1889年）もそのひとりで、第四代修猷館惣受持になっています。

この定簡には、「太宰府備考」（以下「備考」と略す）という著作があります。その序文によると、定簡がかつて郡奉行の頼みに応じて「太宰府旧蹟碑」の碑文を撰述した際に、大宰府に關係する記事を抜粋して一書としたものとあります。実際、「備考」には「太宰府旧蹟碑」の文案が載せられており、嘉永5年（1852）の年紀が記されています。その後「備考」は、筐笥にしまいこまれたままとなっていました。が、縁あって慶応3年（1867）に校正を加え、浄書したものであると、これも序文にみえるところです。しかし、この「太宰府旧蹟碑」は結局、建碑にはいたりませんでした。ですからこの碑文案は、いわば幻の碑文ということも

太宰府人物志

資料室だより⑩

できます。

ところで、現在、大宰府政庁正殿跡には三基の碑が建てられています。そのひとつが明治13年（1880）に建立された「太宰府址碑」で、その撰者は渡辺清です。渡辺は肥前大村の出身で明治7年に福岡県令に任じられ、同14年、元老院議官となって上京するまでその職にありました。

実は、先の「備考」の碑文案とこの「太宰府址碑」の碑文を比較すると、驚くほどよく似ているのです。もちろん建碑に至る経緯を記した箇所などは、それぞれの碑に特有のもので、それから当然違ってきます。大宰府に関する内容的ことがらについては、「太宰府址碑」の碑文は「備考」のそれをほぼ襲っているといっても言い過ぎではありません。

用字にも共通する点が多くあります。これはつまり、県令渡辺清が碑文を撰述するにあたって、定簡の「備考」を参照したことを意味しています。とすれば、次の課題はこの両者がどうして結びついたのかということですね。この点についてはまだ解らない部分が多いのですが、さらに調査を続けたいと考えています。

市史資料室 重松 敏彦